

「おもわく」の語史 —意味用法の変遷と専門語性—

たにぐち ゆう
谷口 悠

同志社大学大学院博士課程前期課程

キーワード

ク語法, 意味変化, 位相語, 専門用語, 当て字

要旨

本稿はク語法「おもわく」を対象とし、コーパスなどを用いることにより、用法・意味について検討した。これまでのク語法の語史研究は「おそらく」に焦点が当てられ、同じく現代語に残存する「おもわく」はあまり注目されてこなかった。そこで本稿では、用例調査から「おもわく」の用法と意味について考察を行った。その結果、名詞用法（ク語法の「今、現に思っていること」という分詞用法が形骸化）と副詞用法（引用句を導く）が併存したのが、近世に名詞用法のみとなること、近世に「恋・恋人」の意味がみられ、近代以降には商業・経済専門用語として使われていたことを明らかにする。くわえて「思惑」の表記が専門用語としての「おもわく」の意味に影響を与えていたであろうことを示す。

1. はじめに

「思惑」（おもわく）は、奈良時代にみられたク語法が現代にまで残った和語である。奈良時代から用いられている「おもわく」の用法や、現代語では使われない「恋・恋人」をはじめとする「おもわく」の意味変遷について明らかになっていないところがある。

そこで本稿は「おもわく」の語史を、用法と意味の2つの観点から考察する。すなわち、いつ名詞用法と副詞用法の併存していたものが名詞用法しかみられなくなったか、後述するような現代語にみられない「恋・恋人」という意味がいつ、どのように使われたのか、である。当て字表記「思惑」が「おもわく」の意味拡大にどのように影響を及ぼしたのかも示す。以下、「おもはく・思はく」を含めた代表表記として「おもわく」とする。

1.1. 先行研究

「おもわく」はク語法の一例に上がるだけで、詳細な研究がなされてこなかった。吉田（1978）は古代文学にみられるク語法を二種六類（動作作用等・存在・形容・推量・打消・過去）に分類し、動作作用等の一例として「おもわく」を取り上げている。しかし、『万葉集』を解釈するための把握にとどまり、上代文学以降の作品は考察の対象外となっている。

ここで、ク語法を含む「おそらく」についての松崎（2000）、李（2014）の研究を取り上げ、「おもわく」において、意味と、使用ジャンルの広がりについての仮説を立てる。

松崎 (2000) は、「おそらく」は上代・中古では動詞としての性質が強く、和文作品にみられなかったが、中世になると和文系の文章へ使用が広がり、近世には呼応の関係が安定し単独で推量の意味を表したことを指摘している。李 (2014) は、「おそらく」は動詞「おそる」の意味を保持していたが、中古以降に「はばかりなく・事態が行われる可能性が高い」という意味になり、近世には「事態が行われる可能性が高い」ことを表すようになったと結論付けている。また、中世末期から近世初期に狂言で多用されたことも指摘している。この 2 つの先行研究は中世から近世に大きな変化があったことを明らかにしている。

これらを参考にすれば、「おもわく」についても同時期に大きな変化があったことが推測でき、次のような仮説が考えられる。上代では「おもふ」に「く」が付き全体を名詞句にまとめるク語法本来の意「今、現に思っていること」を表していたが、中古から中世に「評判」という新しい意味が生じ、近世には「特定の相手に対する思い」という、さらなる新しい意味が使われるようになる。また、漢文・訓点資料から和文系の文章へ使用が広がる。

1.2. 本稿の目的

ク語法の語「おもわく」がどのように歴史的に使われてきたかという変化を、用法と意味に着目することにより明らかにする。具体的な観点は以下の 2 点である。

I. 「おもわく」の副詞用法がなくなり、名詞用法のみとなる時期

II. 現代語「おもわく」にみられない語義とその使用時期・使用ジャンル

I. に関して、一般にク語法の語は名詞用法と副詞用法があるが、語によっては両面をもつものがある。ここでいう副詞用法とは、引用句を導く用法を指す。ク語法には一つの用法のみをもつもの（「ていたらく」(名詞用法)・「ねがわく」(副詞用法)）もあれば、複数の用法をもつもの（「いわく」(名詞用法と副詞用法)）もある。「おもわく」は複数の用法をもっていたが、一つの用法のみをもつようになった例であると思われる。本稿では、「おもわく」の副詞用法がなくなり、名詞用法のみとなる時期を明らかにしたい。

II. に関して、現行の中型の国語辞典で「おもわく」を確認すると（用例省略）、(1) の通りで、③までの意味記述はその他の現行の小型国語辞典⁽¹⁾においても概ね同様である。

(1) 『大辞林』第四版 (2019、三省堂)

- ① 思うところ。考え。意図。見込み。期待。
- ② 他の人々の考え。評判。気うけ。
- ③ 相場の変動を予想すること。
- ④ 恋い慕う気持ち。恋心。
- ⑤ 恋い慕っている相手。意中の人。
- ⑥ [「おもう」のク語法] ⑦ 思うこと。⑧ 思うことには。

注目したいのは (1) の④と⑤の意味区分である。『日本国語大辞典』第二版 (以下『日国]) や『角川古語大辞典』にもあるが、現行の小型国語辞典には全くない。小型国語辞典に掲載がないことは、現代語「おもわく」の意味として使われていないことを意味する。つまり、「恋・恋人」は現代語で使われない特徴的な意味といえる。この意味がいつ、どの

ように使われたのかを含め、本稿では、上代から近代までの各時代における「おもわく」の使用実態を明らかにしたい。また、「おもわく」は語源的に和語であるが、一見漢語のような慣用的漢字表記「思惑」であることに注目する。後述するような近代以降にみられる「売れるか買えるか考えること」という意味に、この表記が関係していることを、ク語法の語「おいらく」の漢字表記にも着目し、文字選択の観点から説明する。

2. 研究方法

2.1. 「おもわく」の意味区分

内田（2015:140）は上代のク語法を「現代語には存在しない分詞相当」と位置づけている。本稿はこれに則り、上代の「おもわく」を「今、現に思っていること」という分詞相当の意と捉える。ク語法の意がはっきりと確認できる上代を単独で扱い、それ以降の意味区分は以下の四つに分類した。(ア)が副詞用法、(イ)(ウ)(エ)が名詞用法に相当する。

(ア) 思うことには：引用句を導く場合。

(イ) 自分の考え・意図：自分のうちに思考が生じた場合。

(ウ) 相手を恋しく思うこと：(イ)が特殊化し、異性を思う気持ちを表す場合。

(エ) 評判：相手が自分に対して考えている場合。(ア)から(ウ)の思考の主体が自己であるのに対し、(エ)の思考の主体は他者である。

この意味区分にしたがい、用例を分析する。

2.2. 研究資料

より多くの例を収集するため「日本語歴史コーパス」(CHJ)を用い、中古から近代にかけて、語彙素「思惑」で短単位検索を行った。上代の作品について、『万葉集』は「萬葉集電子総索引(CD-ROM)」(古典索引刊行会編、塙書房)、『続日本紀』は『新日本古典文学大系』を用いた。『古事記』『日本書紀』、CHJに載っていない作品はジャパンナレッジの『新編日本古典文学全集』(以下『新編全集』)の古典本文全文検索において「おもわく」「おもはく」「思はく」「念はく」「謂はく」「以為」を調査した。CHJと『新編全集』に巻1から10が収録されていない『今昔物語集』、『古事談』『続古事談』は『新日本古典文学大系』、近世前期の井原西鶴の作品は『新編西鶴全集』(勉誠出版)⁽²⁾(俳諧は除く)、近代の資料は雑誌『太陽』⁽³⁾を用い、それ以外の作品は索引をもとに用例を収集した。

以上のように用例を収集し、用例数を適宜表にまとめ、特徴的な使用例とともに示す。

3. 各時代の「おもわく」の使用

以下、時代の区切りについては、上代(奈良以前)、中古(平安)、中世(鎌倉・室町)、近世(江戸)、近代(明治・大正)とし、傍線等は筆者による。

3.1. 上代資料における「おもわく」

上代資料の対象となるのは漢文資料である。「おもはく」と訓みあらわされている箇所は、『古事記』に1例、『日本書紀』に5例、『万葉集』に4例、『続日本紀』に2例あった。

【表1】上代資料「おもわく」の形式別用例数

出現形式で分けると、【表1】	作品名	引用句を導く	単独	総計
の通り、引用句を導く場合、	古事記	1	0	1
単独で用いられる場合の2	日本書紀	5	0	5
種類に分けられる。『古事記』	万葉集	1	3	4
『日本書紀』『続日本紀』には	続日本紀	2	0	2
単独で用いられる例はみられなかった。(2)から(4)を	総計	9	3	12

みると、「おもはく〜とおもひ」または「おもはく〜と」のように引用句を導いている。

(2) 感其麗美以為、盗為己宝

(其の麗美しきに感でて以為はく、盗みて己が宝とせむとおもひ)

(図書寮本『日本書紀』卷第十三「安康天皇(元年二月)」⁽⁴⁾)

(3) …所許尔念久従家出而三歳之間尔垣毛無家滅目八跡…

(…そこに思はく家ゆ出でて三年の間に垣もなく家も失せめやと…)

(『万葉集』卷第九 1740)

(4) 此遠聞食驚伎悦備貴備念久波盧舍那仏乃慈賜比福波陪賜物尔有止念

(此を聞きたまへ、驚き悦び貴び念はくは、盧舍那仏の慈び賜ひ福はへ賜ふ物にありと念へ)

(蓬左文庫本『続日本紀』卷第十七)

(2) では「盗みて己が宝とせむ」、(3) では「家ゆ出でて三年の間に垣もなく家も失せめや」、(4) では「盧舍那仏の慈び賜ひ福はへ賜ふ物にあり」にみられるように、「おもわく」の後に思った内容が記されている。この形式は中古以降の副詞用法に引き継がれる。

一方、(5) は和歌において単独で用いられている例である。

(5) 吾妹子吾恋楽者水有者之賀良三超而応逝所思或本歌発句云、相不思人乎念久

(我妹子に我が恋ふらくは水ならばしがらみ越して行くべく思ほゆ(或本の歌の発句に云はく、「相思はぬ人を思はく」)

(『万葉集』卷第十一 2709)

「片思いの相手を今、現に思っている」ことを異本では詠んでいたようであることがわかる。このように、動詞を一時的に名詞化して「今、現に思っていること」という分詞相当の意を保持しているときは、思っている内容を先行させる場合がある。

3.2. 中古資料における「おもわく」

3.2.1. 漢文・訓点資料

『日本霊異記』には、「おもわく」が5例みられ、すべて副詞用法で用いられていた。

(6) 僧即心念、「明日得物不如取被而出」。

(僧即ち心に念はく、「明日物を得むよりは、被を取りて出づるに如かじ」とおもふ。)

(興福寺本『日本霊異記』上巻)

(6) は (ア) 思うことには、の意味を表し、その内容は、明日に物を得るよりも布団を盗んで逃げるほうがよいということである。上代の漢文資料にみられた用法を受け継いでいると考えられる。(7) (8) の「おもわく」の例も副詞用法である。

(7) 自、^{オモハク}謂、有不世之功

(自、謂ハク、「不世之功有り」とオモ(ふ)。)(神田本『文集』卷第三・天永四年点)

(8) 皆以^{オモハク}為上慢侮人

(皆以為ハク「上慢ニシテ人ヲ侮ツル」上。)(『三教指帰注集』卷下・長承三年点)

一方、引用句を導かない例として、次のようなものも指摘されているが、付訓されていないため参考としておく。

(9) 法師報曰今之彼欲追尋聖迹慕求法耳

(法師報シテ曰ハク「今彼ニ之テ聖迹ヲ追ヒ尋ネ、求法ヲ慕ト欲(ハク)耳」)

(『大慈恩寺三蔵法師伝』卷二・永久四年点)

中古の漢文・訓点資料ではほとんどの場合、副詞用法の(ア)が使われている。

3.2.2. 和漢混淆文

中古における和漢混淆文資料『今昔物語集』には、「おもわく」が195例みられた。漢文資料の影響を受けており、漢文訓読調において副詞用法がみられる⁽⁵⁾ことがわかる。以下の例のように、すべて引用句を導く副詞用法(ア)思うことには、の意味を表している。

(10) は、手の中に仏舍利をもって生まれてきた子どもを見て、父母がただの人ではないと、(11) は、獵師が普賢菩薩をみるができると思っている。(11)の前接の仕方に注目したい。前節までの副詞用法と異なり「の」が前接しており主語が明示されている。このとき、「主語が思うことには」という形で「おもわく」以降の文にかかっている。

(10) 開タル掌ノ中ニ仏ノ舍利ニ粒有リ。父母此レヲ見テ思ハク、「此ノ兒、手ニ仏舍利ヲ捲テ生レタリ。此レ只人ニ非ザルカ」ト思テ(『今昔物語集』卷第十二・第二)

(11) 獵師ノ思ハク、「然ハ我モ見奉ル様モ有ナム」ト思テ

(『同上』卷第二十・第十三)

漢文・訓点資料でみられたのと同様に、和漢混淆文においても(ア)が見て取れる。中古以前にはみられなかった副詞用法の使われ方が指摘できた。

3.2.3. 和文

CHJ に収録されている『竹取物語』『古今和歌集』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『堤中納言物語』『更級日記』『讃岐典侍日記』『大鏡』、および『うつほ物語』に「おもわく」はなかった。『狭衣物語』に2例、『栄花物語』に1例みられ(イ)を表していた。このことから、平安中期から後期の作品において名詞用法がみられることがわかる。(12)と(13)は係り方に注目したい。

(12) 打たれじと用意したるゐずまひ・思はくどもも、各々をかしうみるを、

(『狭衣物語』卷四)

(13) 御堂供養に四所渡りあはせたまひ、行幸、行啓ありしをりになずらふべくも思はくはあらねども (『栄花物語』卷第三十二「調合」)

(12) は「打たれじと用意したる」という連体修飾句を「おもわく」が受けている。(5) が動詞の意味を有していたのとは異なり、名詞的な性格が指摘できる。また、(13) では「おもわく」が単なる名詞として主語となり、後に述語を使う形で表現されている。これらは上代の「おもわく」にはみられなかった名詞的な用法であり、中世以降に多くみられる用法の先駆けとなる例であると言えよう。

このように、副詞用法は漢文・訓点資料や和漢混淆文、名詞用法は和文という区別が生じている。和文では少数ながら名詞用法が発生しており、用法の変化とみるべきかと思われる。中世になってもこの区別は受け継がれるが、新しい意味が見て取れる。

3.3. 中世資料における「おもわく」

3.3.1. 和漢混淆文

『徒然草』『方丈記』『十訓抄』『古事談』『続古事談』『宇治拾遺物語』『古本説話集』『延慶本平家物語』『義経記』において「おもわく」はみられなかった。【表2】の通り、「おもわく」は『正法眼蔵随聞記』に7例みられ、引用句を導く場合と単独で用いられる場合が拮抗していた。

【表2】『正法眼蔵随聞記』「おもわく」の形式別用例数

単独で用いられる「おもわく」のうち、中古までになかった(エ)評判の意味で使われている例を(14)に示す。

引用句を導く	単独	総計
3	4	7

(14) 然るに、「智恵なきは悪し。人皆愚人と思はん」と思ひて、その思はくはに傷みて、 (『正法眼蔵随聞記』二ノ十三)

(14) は、連体修飾語「その」を使い、二格によって動詞「傷む」の目的語となっており、名詞的な性格が窺える。主体が客観的な視点から見た他者となっており、「すべての人が私を愚か者と思うだろう」という内容で善悪の価値判断を伴う抽象的な内容の意味である。この段階では「今、現に思っている」という原義とは大きくかけ離れている。

3.3.2. 和文

『住吉物語』『松浦宮物語』『山路の露』『西行物語』『古今著聞集』『閑居友』『撰集抄』『御伽草子』に「おもわく」はみられなかった。『謡曲集』に1例みられた。(15) は、(イ)の意味で使われており、目が見えないが、人の考えが一言聞いただけでわかることが述べられている。注目したいのは「の」が前接しているところである。

(15) 目こそ暗けれども、人の思はく、一言の内に知るものを。 (『謡曲集』「景清」)

(11) における「の」は主格、かつ副詞用法の「おもわく」に前接していたが、(15) における「の」は連体修飾格であり、名詞用法の「おもわく」に前接している。中古までは物語で人物が思ったことを述べる用法が主だったが、ここでは登場人物以外の他者の考えを述べているとも取れ、(エ)評判の意味と言えるかもしれない。また、謡曲に「おもわく」がみられることからわかるように、時代とともに使用範囲が広がっている。ただし、「景清」

は漢文調の『平家物語』の影響を受けており、中古において漢文調の影響のある『栄花物語』に「おもわく」がみられたのと共通する。そのため、訓読語を離れて和語として定着しきっているとはいえない。なお、口語資料である抄物において「おもわく」の使用は確認できなかった⁽⁶⁾。先行研究において「おそらく」が抄物に多くみられると指摘されていたこととは対照的である。抄物が中世の口語を反映していることから、「おもわく」が抄物にみられないのは、口語として定着していなかったからではないかと推測できる。

3.4. 近世資料における「おもわく」

近世における和漢混淆文資料『英草紙』『西山物語』『雨月物語』『春雨物語』に「おもわく」はみられなかった。本節では、浮世草子と近松浄瑠璃、洒落本、人情本における「おもわく」の使用例を示す。

3.4.1. 浮世草子

『新編西鶴全集』の索引をもとに、作品ごとに「おもわく」の意味別用例数を示すと、【表 3】の通りである。『新編西鶴全集』に収録されている俳諧・浄瑠璃その他を除く 24 作品のうち、19 作品（約 75%）に「おもわく」が使われており、西鶴作品に頻用されていることがうかがえる。特に、『好色五人女』『好色一代女』では各用例数の約半数が「相手を恋しく思う」意味で使われている。（ア）は見当たらなかった。（16）（17）は「おもわく」の後に特定の語「の外」「違ひ」が後接し連語とみなせる例である。

（イ）自分の考え・意図

（16）女はおもはくの外（『好色一代男』巻二・目録）

（17）茂右衛門、おもひの外なるおもはく違ひ（『好色五人女』巻三）

いずれも「考え違い」と解釈することができる。「おもはくの外」「おもはく違ひ」はそれぞれ、「おもひの外」「おもひ違ひ」から類推され生まれたと思われる。

（ウ）相手を恋しく思うこと

（18）丸屋・姫路屋・あかし屋、この三軒に八十余人の姿を見尽し、その中で天神・かこひ七人抓みて、誰に思はくもなく酒になして、（『好色一代男』巻五）

（19）なほおもひまさりて、忍び／＼の文書きて、人しれずかはしけるに、便りの人かはりて、結句、吉三郎方よりおもはくかず／＼の文おくりける。

（『好色五人女』巻四）

（18）は、世之介が遊女 80 人のうちの 7 人の誰に対しても恋しく思う気持ちがないことを表している。（19）の「おもはくかず／＼の文」は「忍び／＼の文」を受け、人目を忍んで相手に恋しく思う気持ちを綴った手紙を送ったことがわかる。（20）は、「おもわく」が形容詞化し、「おもわくらし」となっている例で、涙をぬぐっている様子が「恋しく思う気持ちを起こさせる」という意味で用いられている。

（20）目の中の雫を、黄色なる絹の切にてすこしうつつふき拭たる風情、何とやらおもはくらしきものぞかし（『好色一代女』巻五）

（ウ）のような意味を西鶴が「おもわく」で記したのはなぜであろうか。ここで取り上

げるのが、近世初期の遊里紹介書『色道大鏡』である。『色道大鏡』は西鶴作品に影響を与えたことで知られ、構成・内容の面からの影響が従来指摘されている（藤井 1931:483）。その中に「遊里関連基本語の解説」（渡辺 2006:19）とされる巻第一「名目鈔」があり、そこに「おもわく」の語釈が書かれている。このことから、「おもわく」が遊里の世界における基本語と位置づけられていることがわかる。

【表 3】西鶴作品における「おもわく」意味別用例数

作品名	ア	イ	ウ	エ	不明	総計
好色一代男	0	2	2	0	0	4
諸艶大鑑	0	2	2	0	1	5
椀久一世の物語	0	0	0	0	0	0
好色五人女	0	3	4	0	0	7
好色一代女	0	6	5	0	0	11
西鶴諸国はなし	0	0	0	0	0	0
本朝二十不孝	0	1	0	2	0	3
男色大鑑	0	5	3	0	0	8
武道伝来記	0	2	0	6	0	8
好色盛衰記	0	3	1	0	0	4
懐硯	0	0	0	1	0	1
日本永代蔵	0	2	0	0	0	2
色里三所世帯	0	0	0	0	0	0
武家義理物語	0	0	1	0	0	1
嵐は無常物語	0	2	1	0	0	3
新可笑記	0	3	0	0	0	3
本朝桜陰比事	0	2	0	0	0	2
世間胸算用	0	0	0	0	0	0
浮世栄花一代男	0	4	0	1	1	6
西鶴置土産	0	0	2	1	0	3
西鶴織留	0	0	0	2	0	2
西鶴俗つれづれ	0	5	0	0	0	5
万の文反故	0	1	0	0	0	1
西鶴名残の友	0	0	0	0	0	0
総計	0	43	21	13	2	79

注目したいのが、近年使われ始め通常の使用とは異なると述べられている部分である。

(21) おもはく 此名目、近年もてあつかふ事也。尋常のおもはくといふは、万事思案し慎む事などにいふ。当道のおもはくはさにあらず、男女共におもひよりて、心をかくる貌なり、あひなれて後の詞にはつかはず。しかれども、みづからいふ言

にあらず、わきより推量して、其方は誰におもはくさうなといふ詞なり。

(『色道大鏡』巻第一)

通常の「おもはく」は、いろいろなことを考えることを言うが、遊里の間では、男女両方が心を惹かれて恋い慕う状態であると説明されている。西鶴はこの『色道大鏡』を参考にしていただけた可能性もあろう。というのは『色道大鏡』が書かれた⁽⁷⁾のと同時期に西鶴は作品を書いていたからである。もっとも、重要なことは「おもわく」は遊里語として知られていたものの、日常語として普及していなかったということである。

遊里の場面で「おもわく」を用いる際に、「相手を恋しく思うこと」という意味が派生して生まれたといえよう。このような意味の派生の仕方は、Ullmann (1962) が設けた五つの枠組み、すなわち、適用の推移、使用場面の特殊化、比喩的用法、同音異義語の再解釈、外国語の影響のうち、使用場面の特殊化に当てはまる。「おもわく」が、遊里という位相で使われることにより、特殊な意味をもったのである。「相手を恋しく思うこと」の意味がさらに派生し、恋しく思う相手、つまり、恋人の意味で用いられているのが(22)である。

(22) その心ざしは我が身にふかいおもはくがござりましたれども(『男色大鑑』巻六)

(エ) 評判

(23) (24) は前接する言葉に注目したい。「世の」「人の」となっている。

(23) 武士の義理をもかへり見ず、寝間に忍びて、言葉数々尽くし、人の聞こえ、世の思はくをもかまはねば(『武道伝来記』巻四)

(24) はたちすぎてふり袖着るを、我が町をはなるまでは足ばやに、人のおもはくを恥ぢけるやさしきに(『西鶴置土産』巻五)

これらの場合、思考の主体が自己でなく他者であるため(エ)と考えられる。この意味は西鶴作品において『武道伝来記』に顕著にみられた。

以上のように、浮世草子、とりわけ好色物に(ウ)が特徴的に確認できる。

3.4.2. 近松浄瑠璃、洒落本、人情本

前項では、西鶴作品での「おもわく」の使用例をみた。江戸時代のほかの作品群では「おもわく」はどのように使われているだろうか。CHJに収録されている近松門左衛門の浄瑠璃、洒落本と人情本における「おもわく」の意味別用例数は【表4】の通りである。

【表4】近松浄瑠璃、洒落本、人情本における「おもわく」意味別用例数

ジャンル	ア	イ	ウ	エ	総計
近松浄瑠璃	0	0	3	3	6
洒落本	0	6	1	3	10
人情本	0	4	0	8	12
総計	0	10	4	14	28

近松浄瑠璃に6例、洒落本に10例、人情本に12例あり、(ア)はみられず、近松浄瑠璃を除き、(イ)が確認できた。近松浄瑠璃において(ウ)が3例みられることから、西鶴ほどではないが、(ウ)の意味が定着していたといえる。紙幅の都合上、前項でみられた(ウ)

と(エ)がどのように用いられているかをみる。

(ウ) 相手を恋しく思うこと

(25)は相手を恋しく思う気持ち、(26)は「相手を恋しく思うこと」から派生した恋人の意味で用いられている例である。

(25) 我も、そもじも脇明けのその袖形のいきかたも、なにもかも、まだはつしの糸の、
いとしとまでに思はくの針の本末覚え初め互ひに心かけ袖の、縁により糸、括り
袖針目、人目も思はねば (『薩摩歌』中之巻)

(26) 何とて相公の外におもわくの朗君がござんしよぞ (『原柳巷花語』(洒落本))

(エ) 評判

人情本に顕著であり、12例中8例みられた。(23)(24)と同様に、「世間の」といった主体が他者であることを表すことばと前接すると、この意味になると考えられる。

(27) 内の嫁のお雪の中に子どもの一人も出来るまで遠ざかってもらいたい。さすれば
世間のおもはくもよし。 (『仮名文章娘節用』(人情本)後編下巻)

このように、近松浄瑠璃、洒落本、人情本においても、(ウ)(エ)の用例がみられる。

(ウ)は西鶴作品ほど用いられず、(エ)が特に人情本に多く使われており、広く「おもわく」の使用が定着していたと思われる。

3.5. 近代資料における「おもわく」

近代以降の資料として『太陽』を用いたところ全部で69例(明治期に37例、大正期に32例)みつかった。近世以前の(イ)の意味を引き継いでいる例((28)(29))とそこから少し異なる例((30)(31))の関係を見る。

(28) 其他米は輸出に時機あり、大概四五月を過ぐれば、玄米は輸出すべからざるに至るものなるも、農家の思惑などあり、市場への出廻り遅きため、遂に輸出の時機を失し、突然意外の暴落を来たすことあり。 (『太陽』7「商業世界」1901文語)

(29) 大隈侯が、その同志をして、後の内閣を組織せしめんと希望され、加藤子が、自ら其同志を率ゐて、後の単独内閣を組織せんと期待された方針と、思惑とは、前後全く同一であります。 (『太陽』31「加藤内閣の今後」1925口語)

(28)は、農家の「考え」のために玄米の輸出に適当な機会を逃してしまうことが、(29)は、大隈重信と加藤高明の「考え」は同じであったことがわかる。これらは(イ)として使われている。興味深い使われ方がされているのは商業について書かれた(30)である。

(30) 何時の世何れの時と雖も商売の行はるゝ地には必ず思惑の有るものなれど昨二十七年度の経済市場程思惑の流行せし年はなかりき、前半期には為替相場の低落よりして各種の思惑を起し後半期は戦争の為に投機心を高めたが…彼の米穀、製紙、煙草等の諸品にまで思惑を起し其極近年に見ざる大取組をさへ見たりき

(『太陽』1「二十七年の経済界」1897文語)

日清戦争前後の日本経済界の動向を示している。どのような時でも商売には「おもわく」が必然的にあるが、明治27年ほど「おもわく」が流行した年はなかったとしたうえで、米

穀や製紙、煙草などの商品にまで「おもわく」が及んだことを述べている。「考え」の意味が具体的になり、(イ)'「売れるか買えるかと考えること」という意味で使われている。このような使われ方は、(30) から約 30 年後の (31) の中にもみえる。

(31) ……都会地の米商人の資力が薄弱となり思惑を試むる者が減少し、地方に買附を為さざりし事 (『太陽』31「騰落の分水嶺に立てる米価の前途」1925 口語)

(31) の執筆者である松村金兵衛は米穀商⁽⁸⁾であることから、商業界で「おもわく」が使われていたと考えられる。同時代に出版された商業用語を集めた辞典・語彙集に「オモワク(思惑) 取引所用語である。二三ヶ月先の成行を予想して売買することを斯うう(原文ママ)いふ。思惑する人達を思惑筋といふ。新聞の相場によく出てくる文字である。」(『現代商業辞典』)、「オモワク(思惑) 見込ヲ付ケテ売買スルコト●相場ノ前途ヲ考ヘテ売買スルコト」(『取引所用語字彙』)とある。また、『最新商業辞典』の「おもわく」の項には「オモイレ(思入)を見よ」とあるので「オモイレ」をみると、「二三か月の後を期し前途に見込を付けるをいふ」と書かれている。これらの記述から、少なくとも大正期に「おもわく」が専門用語化していたことがうかがえる。

以上より、近代において「おもわく」は、近世にみられた「考え」という意味を継承しつつも、経済・商業という特定の文脈において(イ)から派生したと考えられる(イ)'「売れるか買えるかと考えること」の意味で使われていたといえる。

4. 「おもわく」の用法と意味の変遷に関する考察

前章までの議論をもとに 1.2. に示した 2 つの観点を考察する。

I. 「おもわく」の副詞用法がなくなり、名詞用法のみとなる時期

II. 現代語「おもわく」にみられない語義とその使用時期・使用ジャンル(再掲)

I. について、名詞用法と副詞用法の両方を有していた「おもわく」が名詞用法のみとなるのは近世であると考えられる。『狭衣物語』『栄花物語』『謡曲』の用例などからわかるように、副詞用法と名詞用法の分岐の兆しがみられるようになり、副詞用法が完全にみられなくなったのが近世であるからである。

II. について、現代語でみられない「恋・恋人」の意味は近世に、浮世草子・浄瑠璃で特に使用された。近代以降にこの意味が「滅びさった」(湯沢 1964:104)のは、位相の問題とかかわっている。すなわち、好色物に特有のことばであるにとどまり、日常用語として定着しなかったと考えられる。

ここで、商業の専門用語としての「おもわく」がなぜ生じたのかを「思惑」の「惑」に注目し、考える。『大字典』によると「惑」は(32)のように書かれている。「惑」で構成される二字熟語「困惑」「迷惑」などと「思惑」は語構成が異なり、「惑」は当て字である。

(32)【字源】形声。心乱れ迷ふこと。故に心をかく。或は音符。【同訓異義】マヨフ義。

惑・迷・眩の別。…惑は事の是非を取り違へて料簡の悪しきこと。又疑ふとも訓

ず。疑惑・蠱惑・不惑・辨惑の語皆此義なり… (『大字典』)

では、なぜ当て字表記が使われ始めたのだろうか。ク語法を当て字表記した「おいらく」の漢字表記を検討する。「おいらく」は「老ゆ」のク語法に由来する。この「おいらく」の「らく」が「楽」と解釈され、「老い楽」として江戸時代初めに使用された例が(33)であり、「年をとり安楽な暮らしをすること」という意味で使われている。

(33) 物忌はすれ共、呪詛の怪しきことを好み、早く老楽を得んと欲して

(『英草紙』巻四・六)

「おもわく」も同様に、「わく」の部分が「惑」と解釈されたことで定着したのではないか。筆者は二次的に意味をもたせるために「わく」を表す字として「惑」が使われたと考える。すなわち、「わく」の表音表記として「惑」を当て、「おもわく(思惑)」と読む前提のもと、「あれこれ迷いながら」といった意味を付加的に認めようとしたということである。この表記方法は、消しゴムを「消誤無」、ごみ箱を「護美箱」と表記する表意兼帯表音性表記⁽⁹⁾(尾山 2016:191)にあてはまると思われる。また、「おもわく」は田島(1992)のいう、意読的表記の段階を経て、字音的表記を獲得した例と考えられる。意読的表記とは、和語にほぼ同義や類義の字音表記をあてたもの(かたみに「紀念」「遺物」、どろぼうに「盗賊」をあてるもの)、字音的表記とは、和語に音の合う漢字をあてたもの(「本当」「本統)」である。江戸末期から明治にかけて意読的表記が多用され、それ以降、字音的表記が確立していったとされる(田島 1992:265)。

「おもわく」については、(34)のように「所思」と書いて「おもわく」と読ませたものが意読的表記の例である。

(34) 親方様の手前お吉様の所思をも能く篤りと考へて見て下され(『五重塔』1892)

「所思」は『日国』によると、「思うところ。考えている事柄。考え。所懐。所見。」という意味である。これは、「おもわく」の(イ)の意味にほぼ相当する。

「おもわく」を「思惑」と書く表記が広く使われ始めたのは近代以降で、確認できた最も古い例は1878年のものであった。この表記は字音的表記の例である。

(35) 我子の^{わがこ}□^{ほうらつゆうしよかよ}埒遊所通ひの^{ごくどう}極道メト^{しうか}主家の^{おもわく}思惑を^{いと}尉^{つま}ひお妻と^{りえん}離縁の^{こと}事を^{ひそか}竊^{こうぐ}に^や香具屋^や弥^や兵衛(雀右衛門)に^{たの}頼む

(華本安治郎 編(1878)『劇場珍報第三号 赤城義臣伊呂波実記』)

字音的表記は「使用されていくうちに漢語的雰囲気を用意、ルビをふる必要がないので多用され」、定着すると「漢字の表意性から意味の拡大が生じる」(田島 1992:266)。このことは「おもわく」においてもあてはまる。すなわち、「所思」と書いて「おもわく」と読んでいたときは「おもわく」の和語意識が強かった。しかし、「思惑」という字音的表記が使用されると、漢語らしくなり、仏教語「思惑^{しわく}」の知識の影響も相俟って、この表記が定着したと推測される。このように、「おもわく」が「思い迷う」意に傾いたとき、商業の世界では「買うか売るか迷う」という意と結びつき、専門用語化したことも考えられよう。

5. おわりに

「おもわく」は上代にク語法本来の意を有し、中古以降に本来の意が形骸化した名詞用法と引用句を導く副詞用法がみられ、近世に副詞用法がなくなり、名詞用法のみとなった。近世には、浮世草子において「恋・恋人」、人情本において「評判」の意味が顕著にみられる。近代には、近世にみられた「恋・恋人」の意味がみられなくなり、商業や経済の専門用語として「売れるか買えるかと考えること」という意味で使われた。また、「思惑」と読ませる前提のもと、「心乱れ迷う」という意味が付加され、「思惑」が定着する中で、近代の意味拡大が起こったことを示した。意読的表記から字音的表記への移行が「おもわく」においても指摘できることは注目すべきものである。

本稿では「おもわく」の表記が「思惑」に定着するまで、どのような過程をたどったのか触れることができなかった。『国字の字典』によると、「遊」で「おもわく」と読む漢字がある。この漢字を含め、「おもわく」の表記について、稿を改めて考察したい。

【注】

- (1) 『ベネッセ表現・読解国語辞典』第一版（2003）ベネッセ、『講談社国語辞典』第三版（2004）講談社、『集英社国語辞典』第三版（2012）集英社、『旺文社国語辞典』第十一版（2013）旺文社、『現代国語例解辞典』第五版（2016）小学館、『学研現代新国語辞典』改訂第六版（2017）学研、『岩波国語辞典』第八版（2019）岩波書店、『三省堂現代新国語辞典』第六版（2019）三省堂、『新明解国語辞典』第八版（2020）三省堂、『明鏡国語辞典』第三版（2021）大修館書店、『三省堂国語辞典』第八版（2021）三省堂、『新選国語辞典』第十版（2022）小学館
- (2) 西鶴作品を全て掲載し、全自立語の語彙索引が示されている点で、研究資料に値すると判断した。
- (3) 「学術・政治・産業から戯曲や小説に至るまで様々なジャンルの文章を含む」（市村 2015:2）とされることから、一定期間、幅広いジャンルの文章を集めており、研究資料に値すると判断した。
- (4) 「おもはく」と付訓していたため、確例と判断した。読み下し文は『新編全集』を参考にした。
- (5) 漢文訓読において、話の範囲を把握しやすいように「イハク〜トイフ」構文が発達し、それに準じて思考内容の範囲を把握しやすいように「オモハク〜トオモフ」構文も成立したと考えられている（大坪 1974:599）。漢文訓読が影響し、和漢混淆文にも副詞用法がみられると思われる。
- (6) 大塚光信編（1971）『抄物資料集成』第1巻〜第6巻、大塚光信編（1980-1981）『続抄物資料集成』第1巻〜第9巻（いずれも清文堂出版）を調査した。
- (7) 『日本古典文学大辞典』第三巻（1984）によると、『色道大鏡』の成立は1678年、再撰が1688年。西鶴が好色物を執筆した1682年から1693年と重なる。
- (8) 「人事興信録データベース」（<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/search>）（2022年12月18日確認）による。第4版の大正4(1915)年1月の情報であるが、『日本紳士録』46巻（1942）に同一の人物があげられていることから、1925年にも生きていたことは間違いないであろう。
- (9) 尾山氏によると、井出至（1999、初出は1969）『遊文録 国語史篇一』で提唱されている。

【参考文献】

- Ullmann, S. (1962) *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell. (池上嘉彦訳 (1969) 『言語と意味』大修館書店)
- 市村太郎 (2015) 「雑誌『太陽』『明六雑誌』における程度副詞類の使用状況と文体的傾向」『日本語の研究』11 (2)
- 内田賢徳 (2015) 『久語法』の本来』『萬葉語文研究』11
- 大坪併治 (1974) 「訓点語の引用形式におけるク語法」『上代の文学と言語』前田書店
- 尾山慎 (2016) 「漢字の『表意的用法』による表記とその解釈」『国語文字史の研究』15
- 菅原義三編 (1990) 『国字の字典』東京堂出版
- 田島優 (1992) 「意識的表記から字音的表記へー和製漢語の一生成過程ー」『国語文字史の研究』1
- 藤井乙男 (1931) 『江戸文學叢説』岩波書店
- 松崎安子 (2000) 『『おそらく』の語史』『日本文学ノート』35
- 吉田金彦 (1978) 「万葉のことばと文学 (16) 〈思はく〉〈散しまく〉〈散しけく〉」『短歌研究』35 (1)
- 湯沢幸吉郎 (1964) 「廓言葉について」『廓言葉の研究』明治書院
- 李知股 (2014) 『『おそらく (は)』の史的变化』『立教大学日本語研究』21
- 渡辺憲司 (2006) 『『色道大鏡』の視座』『新版色道大鏡』八木書店

【データベース】(2022年12月18日確認)

国立国語研究所 (2022) 「日本語歴史コーパス」(バージョン 2022.10, 中納言バージョン 2.7.0)

<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>

ジャパンナレッジ Lib 『新編日本古典文学全集』<https://japanknowledge.com/library/>

ジャパンナレッジ Lib 『日本国語大辞典』第二版 <https://japanknowledge.com/library/>

【資料】

『古事談』『続古事談』『続日本紀』(新日本古典文学大系)、青木侘子ほか編 (1996) 『西行物語 本文と総索引』笠間書院、有賀嘉寿子 (2002) 『古今著聞集総索引』笠間書院、上田万年編 (1917) 『大字典』啓成社、大蔵省主税局編 (1917) 『取引所用語字彙』大蔵省主税局、小峯和明 (2001) 『今昔物語集索引』岩波書店、榎原邦彦ほか編 (1988) 『御伽草子総索引』笠間書院、佐藤義寛 (1992) 『三教指帰注集の研究』大谷大学、清水正巳 (1925) 『現代商業辞典』十合書籍部、菅原義三編 (1990) 『国字の字典』東京堂出版、築島裕 (1965) 『興福寺大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究 譯文篇』東京大学出版会、築島裕編 (2007) 『訓点語彙集成』汲古書院、中村幸彦ほか編 (1982) 『角川古語大辞典』角川学芸出版、寶文館編輯所編 (1907) 『最新商業辞典』寶文館、峰岸明 (1974) 『閑居友 本文及び総索引』笠間書院、安田孝子ほか編 (2001) 『撰集抄自立語索引』笠間書院、山内洋一郎編 (1969) 『古本説話集総索引』風間書房、山内洋一郎 (1996) 『源氏物語外篇山路の露 本文と総索引』笠間書院